

## 初期ニーチェの自然描写

— 「教育施設の将来」における「荒々しい自然」と「静かな自然」 —

木 本 伸

### 1. 物語の構造による自在な論説

バーゼル大学の古典文献学教授として赴任したニーチェは、第1作『悲劇の誕生』(1872)の刊行と同時期に、一般向けの連続講演を行なっている。『われわれの教育施設の将来について』(Über die Zukunft unserer Bildungsanstalten) (以後、『教育施設の将来』と略記)がそれである。この講演はバーゼルの「自由学士会」の依頼により、1872年1月16日から3月23日まで、5回にわたり当地の博物館で行なわれた。本来は7回の予定であったが、後半の2回は、講師の「健康上の理由のため」中止となった。聴衆の入りは毎回盛況であったという。このテキストを「2番目の本として」出版しようという計画は、ニーチェ自身によって放棄されたが、その一部は彼の生年中(1893-1894)に『文学雑誌』(Magazin für Literatur)に掲載されている<sup>1</sup>。

この講演のテキストは、初期ニーチェにおいて独自の位置を占めている。それは、その「物語」の構造による。『悲劇の誕生』や4編の『反時代的考察』(1873-76)に代表される初期ニーチェのテキストでは、同時代や古代ギリシアの文化が直接論じられるのが通例である。ところが『教育施設の将来』では、論壇のニーチェは友人とともにライン河畔で経験した不思議な出会いを追想する語り手(Erzähler)に撤しており、ここから架空の対話が展開していく。ではこのような「物語」の形式によって、ニーチェはどのような効果を狙ったのだろうか。それは何よりも、論説(講演内容)に対する直接的な責任から自分を解放することであった。

この講演では4人の人物が登場する。ボン大学の学生であるニーチェと友人。ライン河畔の山で2人が出会う哲学者と彼につき従う青年。4人は、美しい晩夏の山頂で、教育施設(ギムナジウム)の現況に対して批判的な思想を展開していく。こうして聴衆は、通常の講演に耳を傾けているというよりも、架空の人形芝居を前にしているかのような思いを抱くことになる<sup>2</sup>。しかもその際、議論を導くのは終始老いた哲学者一人であり、同様の青年と2人の学生たちは私見を述べるたびにその叱責を受けることになる。つまり、狂言回しとしてのニーチェは、大切な討論に参加した「耳証人」(Ohrenzeuge)(S.651)としての責任は分かちつつも、聴衆に対してはあくまでも哲学者の意見を紹介するという姿勢を崩そう

とはしない。しかし逆説的にも、こうして論説内容に対する直接的な責任から解放されることによって、ニーチェは哲学者に仮託しつつ自在に自説を展開することが出来たのである。物語とは、公衆の面前で「危険な真理」(S.652)を語るための形式であったのである。

## 2. 語りだされる自然

では実際に、この「危険な真理」なるものはどのように語られていくのだろうか。物語の語り手に過ぎないニーチェは、もはや誰もばかする必要はない。彼はいかなる論証も飛び越えて、「未来をローマの腸占師のように現代のはらわたから(aus den Eingeweiden der Gegenwart)」(S.645)直覚的に判断する。このテキストでは、このような生理的な表現が多く見いだされる。例えば、もしもジャーナリズムで好まれるような言い回しに対して「生理的な嘔吐(einen physischen Ekel)」(S.676)を感じないのなら、教養を求めることなどやめてしまえと彼は言う。生理的な表現は受手に対して余地なく独断的に響く。このような論述がなされたのは、論者がいわば自らに等しい者のみを対象として欲していたからであった。この点について、彼は「講演の前に読まれるべき序文」で次のように宣言している。

いまや彼はこの本を手にも、同じような感情によって揺り動かされている人々を探し求めている。姿を現せ、その存在を私が信じる君たち、散り散りにされた者らよ。ドイツ精神の苦悩と退廃をわが身に引き受けた、君たち私欲を離れた者らよ。(…)今度ばかりは決して君たちの隠棲と不信の洞窟に潜り込まないで欲しい。少なくともこの本の読者であれ。そして君たちの行動によってこの本など否定し、忘れ果ててしまうのだ。考えてもみよ、この本は確かに君たちの告知者なのだ。(S.650)

こうして、物語という技巧をこらした形式に、はらわたにまかせて遠慮なく内容が与えられていく。このように腹藏なく記述されたテキストとは、もはや語り手自身の自然(Natur)の表現に他ならない。しかも、この内なる自然というべき人格は、外なる自然、つまり登場人物たちが身をおく環境と深く通じている。この内なる自然と外なる自然の関係について、彼は青年教育をめぐる次のように述べている。

君たちが青年を本当の教養の径へと導きたいと思うのなら、青年の素朴で信頼にあふれた、あたかも個人的で直接的な自然との関係をそこなわないように気を付けねばならない。青年に対して、森や岩壁、疾風や秃鷹、花々の一つ一つ、蝶、野原、山頂などがそれぞれ自分の言葉で語るのだからなければならない。投げ散らされた数え切れぬほどの反射や反映のように、それらの中に青年は、あたかも自分自身を再認識するに違いない。こうして青年は、われ知らず自然の大いなる比喩によってすべての存在の形而上学的な一体性を追感し、同時に自然の永遠の持久性と必然性ともに自分の心を和ませるだろう。(S.715f.)

いかに状況が不利であっても、真の教養は必ず勝利すると彼は言う。それは「最大にして最強の同盟者である自然」(S.646)が彼の味方となるからである。自然こそがこの講演の秘められたテーマであった。「危険な真理」とは「自然」を語ることに他ならなかった<sup>3</sup>。しかし「自然」は、容易にその唯一の姿を表わさない。それは状況によって刻々と表情を変じていくのである<sup>4</sup>。

## 3. 静かな自然

「教育施設の将来」は初期ニーチェでも特に自然描写のゆたかなテキストである。彼は4人が登場する舞台設定にこまやかに気を配っている。まず、ボン大学の学生である2人は、所属する学生同盟のライン河畔での「乱痴気騒ぎ」を離れ、あらかじめ探しだしておいた「さみしい所」(die einsame Stätte)(S.654)あるいは「静かな場所」(Ruheplatz)(S.659)をさして山を登っていく。それは2人だけでギムナジウム時代に結成された自由な創造活動のための集会を記念するためであった。一方、ともに青年を連れた哲学者は、偶然にも2人の学生と同じ時刻に同じ場所で旧友との再会を予定していた。この再会では、ドイツ文化の現状に対して様々な議論が交わされるはずであった。弟子の青年は山頂の様子を「友人との再会のための静かで人里離れた孤独」(diese ruhige und abgelegene Einsamkeit)(S.659)と表現している。ここで示唆されている静けさと教養との関係は、後の教育状況をめぐる議論の布石となっていく。以上のように、ここでの自然描写の基調は静けさである。静けさは、5回の講演の舞台となるある晩夏の日が午後から夕刻、夕刻から夜へと移ろっていくにつれて、少しずつ深まっていく。その様子を見てみよう。まずは2人を含むボン大学の学生たちが夏学期の終了を記念して、ある午後、ライン川へと出掛けていくときの風景である。

(1.午後)

それは、少なくとも私たちの地方の気候では、ただこの晩夏の季節だけが生み出すことの出来るような、あの完璧な日のひとつでした。大空と大地はならびあい落ちついて、響きをひとつに流れてゆきます。陽光の暖かさと秋のすがすがしさとどこまでも続く紺碧は、奇跡のように溶け合っています。

Es war einer jener vollkommenen Tage, wie sie, in unserem Klima wenigstens, nur eben diese Spätsommerzeit zu erzeugen vermag: Himmel und Erde im Einklang ruhig neben einander hinströmend, wunderbar aus Sonnenwärme, Herbstfrische und blauer Unendlichkeit gemischt.(S.654)

ニーチェはこよなく晩夏を愛した人だった。からりと晴れ、視界は遠く、市場は果実にあふれ、すべてが心地よくゆっくりと流れていく季節。しかしここにはまだ、どこか落ち着

かない、人々をおのずと活発にするような何かがある。テキストでは、「大空と大地が(…)響きをひとつに流れてゆく」や「陽光の暖かさ」という言葉によって、この活動的な力が表現されている。事実、この午後の描写の後で、ニーチェは学生組合の学生たちが蒸気船へと乗り込み、ライン河畔での酒と音楽の歓楽へと繰り出していく様子を描いている。いまはまだ、自分一人(mit sich allein)になる時ではない。静けさが深まるには、時を待たねばならない。

次は、酒場での学生組合の騒ぎを抜け出したニーチェと友人が、外気にふれたときの様子である。酒場は「乱雑にますます早まっていくフィナーレ」の中で、「雄叫びにもいた最後の合唱」に包まれていた。この時2人は合図を交わし、仲間に気づかれぬようドアをすり抜けていく。引用文の冒頭には、「急に」(plötzlich)に始まる名詞句が置かれている。ここには、屋内の熱気の中からドア一枚を隔てて初秋の冷気にさらされた感覚の驚きがこめられている。

#### (2.夕刻)

すると急に、さわやかな音ひとつしもない自然の静けさ。影はもういくらか長くなり、太陽は微動もせず燃えつつも、すでに沈みかかっていた。そして緑がかかったきらめくラインの波間からは、かろやかな風が私たちのほてった顔にそよいでくるのでした。

Plötzlich erquickende, athemlose Naturstille. Die Schatten lagen schon etwas breiter, die Sonne glühte unbeweglich, aber schon niedergesenkt, und von den grünlichen glitzernden Wellen des Rheins her wehte ein leichter Hauch über unsere heißen Gesichter.(S.655)

この叙述では、冒頭の「急に」による場面転換や、それを受けた「影はもういくらか長くなり」や「太陽は(…)すでに沈みかかっていた」などによって、午後から夕刻への時間の経過がはっきりと示されている。しかもこの時間の経過は、そのまま晩夏から初秋への季節の移ろいをも示唆してはいないだろうか。「ラインの波間から」二人の「ほてった顔にそよいでくる」微風は、もういくらか切るような冷たさをひそませていたことだろう。こうした時間(季節)の経過によって、いっそうはっきりとした輪郭を与えられるのが「音ひとつしもない自然の静けさ」ある。この自然の静けさが舞台の前面に現われるためには、徒党の騒がしさと熱気をはなれ、午後が夕刻となり、晩夏が初秋を匂わせていく必要があった。では、このような静けさによってもたらされるものとは何なのだろうか。それは外なる自然から内なる自然への視点の転換である。自然の静けさとともに、人間は一人きりになり、自分の内なる自然へと向かっていく。このような静けさによる内省への過程がはっきりと示されているのが次の引用である。

「2.夕刻」の場面から次の「3.夜」までのあいだに、ニーチェと友人は山を登り、かね

て用意してあった山頂近くの射撃上でピストルの腕を競う。講演者によれば2人は学生組合の中でもより抜きの射撃の名手であり、ピストルにこの上ない歓びを見いだしていたのだという。そのため2人はピストルの騒音に憤激した哲学者の一行と衝突し、山頂の場所をめぐる対峙するのである。

#### (3.夜)

私たちは敵意にあふれた二手に別れ、一言も発せずに長いこと対峙していました。頭上にひろがる宵の雲はますます朱に染まり、宵はますますひそやかにやさしくなっていました。私たちは自然が自分の芸術作品に満ち足りて、完璧な一日を、自分の日々の仕事をしめくくっていく、いわば自然の規則正しい息づかいに耳を澄ませています。

Während wir so stumm, in feindselige Gruppen geschieden, geraume Zeit beieinander standen, die Abendwolken über uns sich immer mehr rötheten und der Abend immer ruhiger und milder wurde, während wir gleichsam das regelmäßige Athmen der Natur belauschten, wie sie zufrieden über ihr Kunstwerk, den vollkommenen Tag, ihr Tagewerk beschließt(一)(S.660)

この第3の引用では、まだ夜に没しきれない夕の残影がとどめられている(「頭上にひろがる宵の雲はますます朱にそまり(…)」)。しかし、先に述べたように「2.夕刻」の場面からは、すでにまとまった時間がながれている(ドイツ語原文で5頁)。それをはっきりと示すのが「宵」(Abend)という言葉や、「自然が(…)完璧な一日を、自分の日々の仕事をしめくくっていく」という表現だろう。さらに、自然が次々と夜の衣を重ねていく様子が、「ますます朱に染まり」、「ますますひそやかにやさしく」という比較級の語法によって表現されていく。ことに「ますますひそやかに」(immer ruhiger)によって、先の自然の静けさが明瞭に場面を領しつつあることが知られるだろう。それとともに、人間もさらに深く視線を自己の内側へと転じていくのである。

それを示すのが、「いわば自然の規則正しい息づかいに耳を澄ませている」という表現である。この「耳を澄ませる」(belauschen)という動詞は、以後テキストの中で鍵を握る語となっていく。一日の終わりとともに迫ってきた自然の静けさは、ついに青年たちを自己の懐のうちに抱きとる。そして青年たちは自分を包みこんだ自然の息吹に耳を澄まし(belauschen)、それによって外なる自然に呼应し響き合う自己の内なる自然に気づいていく。こうして4人の山頂での邂逅以後、テキストの自然という言葉は、外なる自然から内なる自然へ、あるいは両者の渾然としたものへとその意味を変えていくのである。

#### 4. 人格としての静かな自然

「教育施設の将来」で繰り返される主張の一つに、すぐれた教師の要請がある。真の教

養の伝承のためには、ギリシア・ローマ世界を体現したような教師を欠くことは出来ない。ギムナジウムの生徒たちは、教師のきびしい指導のもとに古典語とその文学を学んでいくのである。「偉大な指導者が必要であり、あらゆる教養は服従とともに始まる」(S.749)と彼は言う。このような服従(Gehorsam)の称賛は、全編をつらぬく教育論の主旋律といえるだろう。

服従によるあるべき師弟関係は、なによりも物語中の4人の姿に結晶されている。俗塵を遠くはなれ、いよいよ冷たく透明になっていく山頂の空気。そこで教養エリートたちの教師を演じるのは哲学者である。この教師に対して、ともに青年と二人の学生は深い畏敬とともに付き従う。このニーチェの教育理想は、例えばソクラテスとその弟子たちとの関係を想起させる。ただし、2つのサークルは大切なところで性質を異にしている。それは討論の有無である。哲学者と青年たちとの議論はつねに一方的である。ニーチェのテキストは、ほぼ哲学者の独演ともいえるだろう。ここでは討論の代わりに、服従が師弟関係を成り立たせているのである。

では服従が求められる根拠は何なのだろうか。それは自然である。ニーチェのいう教師とは、外なる自然の人格的表現に他ならない。そして自然に学ぶとは、自然を体現した教師のもとに直参し、その言葉に耳を傾ける(belauschen)ことである。この自然と教師の同一性を証左する一文を引いておこう。物語の中で山頂の場所をめぐり対立した4人は、二手にわかれ出来るだけはなれて場を占め、それぞれの営みに赴くこととなった。ところがはずれのベンチに腰掛けていたニーチェと友人は、木々の向こうから洩れてくる哲学者の声に気付き、われ知らず関心をそそられていく。

5年前のあの頃と同じように、ラインはやわらかなもやの中を流れていました。またあの頃と同じように、天空は輝き、森はこころよく香っていました。遠く離れているベンチの人気のない片隅が、私たちを迎え入れてくれました。そこでは私たちは殆ど身を潜ませているようで、そのため哲学者もそのともも、私たちの顔を覗き見ることは出来ませんでした。私たちは二人きりだったのです。哲学者の声がくぐもりながらこちらの方へ伝わってくる時には、その声はそこまでやってくるあいだに、かさかさという木の葉の動きにつつまれ、森の高みに群がり集まった何千もの生き物たちのブンブンというざわめきのもとに、いわばひとつの自然の音楽(Naturmusik)になってしまうのです。(S.663)

この場面でも、前節で確認したような自然の懐に2人が抱かれている様子が見えるだろう。しかし自然とは意味なき混沌ではない。2人が耳を澄ますにつれて、はっきりと聞こえてくるのは自然と一体となった哲学者の声である。この声をニーチェは「自然の音楽」と表現している。この音楽の基底音はやはり静けさである。では、なぜ人格という自然に静けさが求められるのだろうか。それはまず、1.静けさが耳を澄ます(belauschen)ための必須の

条件であるからだ。教養を求める青年は、「くちをひらいた器」(S.721)となって、すぐれた教師と大いなる自然に教養を乞わねばならない。その時、自然の音楽を傷つけるような騒がしさはすべて慎むべきであろう。さらに、2.教養を求めるのならば、教師と自然とによって学ばせられたことを「深く考える」(nachdenken)ことが大切である。そして深く考えることのためにも、静けさは欠くことが出来ない。次の引用は「講演の前に読まれるべき序文」の一節である。ここには、静けさのなかで深く考える読み手というものを、どれほどニーチェが求めていたかが示されている。

この本は静かな読者(die ruhigen Leser)のために定められている。それは転がり続ける私たちの時代の目の眩むような忙しさにまだ引きずり込まれてはおらず、時代の歯車に押し潰されることにまだ偶像崇拝的な喜びなど感じる事のない、つまり、ほんのわずかな人々だ。(…)そのような人は、まだ読むときに考えることを忘れてはいなかっただろう。彼はまだ行間にひそむ秘密を読み取ることを心得ているし、それどころか、もしかすると読み終えずと後になって、読んだことについて深く考える(nachdenken)ほどに浪費的である。それも書評やまた本を書くためなどではなく、ただ深く考える(nachdenken)ためだけなのだ。(S.649)

同じテーマについてももう一文を引用しよう。ここでは哲学者が学生たちに向かって、直截に静けさと深く考えることの大切さを説いている。その際、模範的な例として持ち出されるのが古代のピタゴラス教団である。これによって彼の主張の反時代的(unzeitgemäß)な性格も鮮明に表現されている。

ではこの点についてしっかりと考えて(nachdenken)みて下さい。(…)私は貴方たちが教養ある人間になるために深く考えること(nachdenken)の邪魔はしません。私は貴方たちに幸運と一立脚点を祈ります(…)。哲学者というものは貴方たちが哲学することを妨げようなどとは思わないものです。どうか彼を貴方たちのピストルで驚かすようなことだけはやめて下さい。それでは今日はひとつ、若いピタゴラス学徒たちの真似をしてごらん下さい。彼らはれっきとした哲学の従者として、5年ものあいだ言葉を発してはならなかった(schweigen müssen)のです。貴方たちも目下取り組んでおられる将来の独自の教養のために、15分の5倍くらいは同じことをやってみせることができるでしょう。(S.662f.)

こうして人間の内なる自然である人格に対して、ニーチェは何よりも静けさを求める。その静けさはそのまま、彼が批判する現代文明の急所を突くものであった。山頂の自然と一体となった内なる静けさ。これこそ第一の危険な真理であったのである。

## 5. 人格としての荒々しい自然

ところが、静かな自然は少しずつその姿を変えていく。静けさは、唯一の真理ではなかったのである。そもそも『教育施設の将来』は、「永遠に変わらぬ自然の意図に逆行する」(S.647)教育状況の変革を要求していく好戦的な書物であった。ニーチェ自身、この書を戦地へ先駆ける「伝令官」(Herold)(S.650)と名付けている。この好戦的なあり方は、哲学者の人格の荒々しさとして表現されていく。まずは彼の人格が静けさから荒々しさへと変化していく様子を見てみよう。

こうした神聖な自己省察に身をゆだねつつ、私はこの満ち足りた響きの中で、私たちの教育施設の将来をめぐる問いにもう結論を出してしまおうとしていました。その時、遠くの哲学者のベンチから響いてきていた自然の音楽(Naturmusik)がそれまでの性格を失い、ずっと力強く明瞭に(viel eindringlicher und artikulierter)こちらに伝わってくるように思われだしたのです。突然、私は自分がじっと聴いていることに、耳を傾けていることに、情熱を注いで(mit Leidenschaft)耳を傾けていることに、耳を前にさし伸ばして聴いていることに気付いたのです。(S.664)

初めの「満ち足りた響き」とは、哲学者の声や木々のふれあう音が一体となった心地好い自然の音楽を意味している。この穏やかだった音楽が、近づきつつある疾風のおとずれを告げるかのように「力強く明瞭に」その響きを変えていく。それとともに、青年たちのパトスも高まっていく。以後、テキストでは「戦い」(Kampf)やそれに類する言葉が目立つようになる。哲学者に鼓舞されて、ともの青年も手のひらを返したように次のように血気盛んな弁舌をふるい始める。

いまや本当に私は、ずっと大胆に戦場を見やっています。本当に私はもう、自分の余りにも早すぎた逃亡を非難したい気持ちです。それどころか私たちは、自分のためには何一つ欲しはしません。この戦いによってどれだけの個人が減るのか、例えば私たち自身がその第一の者として倒れることになるのか、そんなことは私たちを煩わせるべきでもありません。私たちが没落していくその瞬間に、きっと別の者がその栄光の徴を私たちが信じる軍旗をつかみ挙げてくれることでしょう。私は自分がこのような戦いのために十分に強力であろうか、自分は長期にわたって抵抗することが出来るだろうか、そんなことさえもあれこれ考えようとは思わないのです。そんな敵たちの嘲笑的な高笑いのもとに倒れていくことは、栄光に満ちた死であるとさえ言えるかも知れません。(S.695f.)

人格としての荒々しい自然の登場とともに、テキストはこのように激越で悲壮な響きをおびていく。ではこの激しさは、哲学者のきらう騒々しい熱狂とは違うものなのだろうか<sup>6</sup>。これを明らかにするために、『教育施設の将来』でニーチェが好んで言及するシラー像に

ついて考えてみたい。

古典語教育の重視という新人文主義の再生を説く『教育施設の将来』では、ギリシア・ローマのみならず、それを創造的に摂取したドイツ古典文学についても多くの頁がついやされている。その際、他の作家と比べて特に高く評価されているのがシラーなのである<sup>6</sup>。例えば最終講演では、ブルシェンシャフト運動との関連で次のようにシラーの名が使われている<sup>7</sup>。まずニーチェは、ブルシェンシャフトという青年による祖国解放運動を「大学の歴史が同じような試みを有することはもはやなかった」(S.748)無比のものと位置付ける。それは、これが「真なる教育施設を打ち建てようという初めての試み」(S.749)であったからだ。青年たちは旧体制を打破すべく、「かつてフリードリヒ・シラーが同志たちの前で『群盗』を朗読したときと同じであろう、この上もなく誇り高い反旗の面持ちで立ち上がった」(S.748)のである。「この怒れる若者たちの姿は、おずおずとした物事の上面にしかふれない視線には、シラーの群盗たちとさして変わらないように見えたことだろう」(S.748)。このように、シラーとブルシェンシャフトの精神は相通じていたとニーチェは言う。その精神とは真理を省みない世俗権力に対する反旗であった。彼らは哲学者たち一行のように、山頂から俗世を見下ろす。しかも彼らは圧倒的に不利であり、それゆえに士気高く孤高である。さらに真理のための戦いであるがゆえに、その怒りは聖なる怒りである。その山頂の空気を思わせるような清さ鋭さが、彼らの怒りを世間の騒がしさからへだてる所以であった。ニーチェはこの聖なる怒りを、ゲーテの「鐘へのエピローグ」に託して読者に伝えようとしている。この詩は、「戦うものたち」として「もっとも高貴にして崇高なる表現である偉大なシラー」(S.646, Siehe auch S.725)のスケッチであると彼は言う。

いまや彼の頬はいよいよ赫々と染まる。

それは決して去ることのない青春のためであり、  
遅かれ早かれ鈍重な世界の抵抗を屈伏せしめる

あの勇気のためであり、

そしてまた、つねに高められつつ時には大胆に突撃し、  
時には忍びつつ身を屈めるあの信仰のためなのだ。

それは、良きことが力を及ぼし、成長し、役立たんがため、  
またついには良き日が高貴な者のもとに来たらんがため。

(Goethe "Epilog zur Glocke" S.646)

「聖なる怒り」や「荒々しい自然」は、シラーやブルシェンシャフトのみならず、それを語る哲学者の人格そのものでもある。しかもこれらは、山頂という環境とも通底している。王侯をも恐れさせた『群盗』のような至純な怒りこそ(Siehe.S.748)、ニーチェが来たるべき世代に期待したものであった。ここに彼は真理と自然の表現をみたのである。

## 6. 「静けさ」と「荒々しさ」による2極的自然描写

静けさと荒々しさという2つの自然。これらは互いにどのような関係にあるのだろうか。最後にこの問題について考えてみたい。まずテキストを通読して気づくことは、両者はその対称的なあり方にもかかわらず、ともに自然の音楽としてなだらかにテキストを彩っているということだ。例えば、滔々と述べられた演説のあとで、ふと沈黙がおとずれる。するとその間隙を縫って夜の静けさが場をひたしていく。そのような例として適当なのは、第2回講演から第3回講演へかけての場面である。ここでは、「力」(Kraft)(S.691)、「戦い」(Kampf)(ebd.)といった言葉がとびかう17頁にもわたる哲学者の戦闘的な長広舌のあとで、確実な判断は誰にも下すことは出来ないという結論が引き出される。そして、この回は次のように結ばれる。

---誰も？弟子はある種の感動にふるえる声で哲学者にそうたずねた。そしてふたりは黙り込んでしまった(verstummen)。 (S.692)

このような静から動、動から静への転換はテキストの随所に見いだされる。こののち、第3回講演では、まず「真剣な長いひとやすみによって中断された(…)会話」(S.693)「哲学者もそのともも、意気消沈して沈黙に沈んだまますわりこんでいた」(ebd.)という引き継ぎの説明がなされる。そして、ようやく「しばらくのあいだ黙り込んで考え続けたあと」で、とも青年は師に向かって次のように語り始める。

先生、あなたは私に希望を与えて下さいました。あなたは私の洞察を、そしてそのことによって私の力を、私の勇気をまして下さいました。(S.695)

このあとは、再び例の朗々とした弁舌である。

このように静けさと荒々しさは、ながれるように織り合わされている。しかし2つの自然は本当に相容れるのだろうか。両者はその原理において互いに矛盾するのではないだろうか。荒々しさは静けさを破り、静けさは荒々しさを好まない。静かに考えると観る(テオリア)ことであり、そのとき行為は視点を揺らすものとして避けられねばならない。また革命を叫ぶときには立ち止まることは好ましくない。考えることは往々にして行動を否定するのである。このように両者は架橋しがたい。この矛盾を通して、『教育施設の将来』における自然の全体像について考えてみたい。

そもそも矛盾とは何なのだろうか。ニーチェはこれを逆説的にも真理との深い関係において捉えていたようだ。ここで後期ニーチェのよく知られた文章をみてみよう。

かりに真理が女であるとするならば---なんだと？これまで哲学者たちはみな、彼らが教条主義

者であったかぎり、女に取り入るのは下手であったという疑いは確かなものとなるのではないだろうか。彼らがこれまで真理に近づこうとするときに見せていた仰々しい真面目さや不器用な押しの強さは、ほんの一人の女性をわがものとするためにもぎこちなく、不適当な方法だったのではないだろうか。女が取り入れられなかったことだけは確かなことだ。(『善悪の彼岸』序文1, KSA.5,S.11)<sup>8</sup>

この謎めいた文章にはニーチェ独自の視点が働いている。彼は真理という概念をまったく逆転させたのである。これまでの哲学者たちはみな「教条主義者」(Dogmatiker)であったと彼は言う。教条主義者はつねに「真理はAである」と確定的に考える。しかし、かりに「真理はAである」のなら、そのときA以外のすべての可能性は排除され、真理(多様な現実)は局限されたものにならざるをえない。だが真理は実際には「女」のように気紛れで、観察者の視点によって様々に表情を変えていく。教条主義者たちがつかまえた真理とは、実際にはあるべき真理の影にすぎない。言葉が何かを確定するものであるかぎり、真理とは言葉によっては表現しようがないものなのである。

おなじような意味で、「自然が女であるとするならば」と語り始めることも出来るだろう。自然も「女」のように刻々と表情を変えていく。その一瞬を捉えるならば、それは確かに真実の自然の一部であるに違いない。しかし、一部をもって全体であるかのように主張するなら、それは教条的な誤断と言わざるをえないのである。かりに「荒々しい自然」や「静かな自然」の一方のみを掲げ、それを自然そのものであるかのように語るのならば、それもやはり誤断である。

では、言葉によってあるがままの自然に接近することは出来ないのだろうか。ここでニーチェに特徴的な2極的な認識方法が登場する<sup>9</sup>。例えば『悲劇の誕生』でニーチェはディオニュソスとアポロという独自の対概念を発達させた。ふたつの概念は生の奔流と形象化という互いに異なる内容を持つ。アポロはディオニュソスに枠を与えようとし、ディオニュソスはアポロを越えて流れだそうとする。求められるべきは両者の微妙な均衡である。アポロのみでは空疎な論理の専制であり、ディオニュソスのみでは意味なき混沌となってしまう。このような両者のせめぎあいによって、ニーチェの描く世界は生きて動くものとなった。もしも彼が、ディオニュソスかアポロの一方のみを自然と歴史を動かす原理として考えたのならば、その世界は真実のそれからずっと遠ざかった硬直したのものになっていただろう。

同じことが『教育施設の将来』の自然描写にもあてはまる。「荒々しい自然」と「静かな自然」は、いわばあるべき自然の両極である。つまり、この両極が同時に示されることで、自然はそのあいだの多様な変化をふくみつつ限りなく真実に近い姿で描写されることになる。それは高気圧と低気圧がせりあいつつ様々な気象をつくりだしていく様子に似ている。2つの自然によって、『教育施設の将来』の自然描写はいのちあるものとなった<sup>10</sup>。

初期ニーチェにおいては、このような2極的な表現方法はまだ意識的にもちいられているとは言えないかもしれない。しかし、先の『善悪の彼岸』で示された矛盾によってこそ真理に近づき得るという直感は、すでに『教育施設の将来』でも働きは始めている。静かでも荒々しい山頂の自然と哲学者の人格。こうしてあるべき自然や人間の姿が描かれることになったのである。

#### 注

1. テキストの歴史的諸関係についてはKindlerとJanz(S.444ff.)を参照した。以下、引用は頁数のみを示し、依拠したテキストはすべて参考文献として列挙した。
2. これはニーチェ自身が意図したところであった。彼は聴衆に向かって、この講演を「私の体験の人形劇場」(Marionettentheater)(S.712)と形容している。
3. あるところでは、教育施設の現状は「永遠に変わらぬ自然の意図に逆行しており」、彼の主張するエリート教育こそ「自然の必然的な法則であり真理そのもの」(S.647)と述べられている(Siehe.S.647)。この「自然」と「真理」の等置に注意しておきたい。
4. 主張の正当化のために「自然」を持ち出すのは、ルネッサンス以来の伝統である。それまで真なるアイデアの仮象世界か神の国のための修練の場とされていた自然(現世)は、ルネッサンスにより、それ自身に価値を内在させる畏敬の対象となった(Vgl.Gaarder,S.239)。生涯をかけて地上の復権をとなえたニーチェにとっても、自然はつねに肯定的な存在であったといえるだろう。私たちのテキストでも、「自然」と「真理」の無前提な等置にその一例を見ることが出来る。しかしそのため、そこには彼の理想の歪みも刻印されている。例えばKaulbachは「ニーチェの自然像は、人間が自然に対する形で身を置いている歴史的状況をつねに反映している」(S.442)という立場から、自然概念の考察を出発している。これは妥当な見方である。またKaulbachとほぼ同じ前提に立ち、ニーチェの『教育施設の将来』でも見いだされる初期ニーチェの天才を歴史の目的とする思想(Vgl.S.699f.)を系譜的に研究したChampioniは、次のように結論している。「ただ天才のみが人間的なものを普遍的に具体化しており、理想的な形で〈種〉により追求される目標を指し示しているというテーマは、初期ヴァーグナーの著作にもみられるフォイエルバッハのテーマのイデオロギー的な転倒である」(S.84)。これは、コンミュンや社会主義運動の台頭という当時の社会的不安の表現でもあった(Vgl.Championi,S.85)。ニーチェ自身、後年(1878)「〈天才という迷信〉は現実の前で目を閉ざすという態度をもたらした」(引用はChampioni,S.83)と自己批判している。筆者はこれらの批判は妥当であると考えている。しかしテキストを外部から規定しようとするこれらの方法はいったん措いて、本論ではニーチェの自然描写そのものを内在的に追跡していきたい。その結果、真理概念の変更にまで通じていく彼の2極的な認識構造が明らかにされていくだろう。

5. 士気を高める「荒々しい自然」とは、強烈なバトスの表現である。しかし、他方で哲学者は、ある種の熱狂に対しては否定的な態度を示している。例えば、時代の潮流である大衆教育の実践者たちに対しては、軽蔑的に「群れ」「熱狂」(どちらも"Schwarm")(S.728f.)という語が与えられている。また、酒場で痛飲したボン大学の学生たちが山をさして登ろうとしている場面では、彼は頂上から見下ろしつつ彼らを「大学で学ぶ攪乱者たちの一隊」(eine Schar studentischer Störenfriede)(S.735)と呼ぶ。どうやら老哲学者は集団のつくりだす熱狂は好まないようである。つまり、「荒々しい自然」とは、陶酔による群衆のそれではなく、シラーの例が示すような孤高の個人の聖なる怒りである。このことは、ニーチェをバトス(あるいはディオニュソス)の礼賛者とする理解がひろくゆきわたっているだけに強調されてよいことだろう。

6. テキストでシラーについて言及されている箇所は次の通りである。これは第1回、3回講演を除く、「序文」をふくむすべてのテキストにわたっている。

S.646, S.678, S.685, S.690, S.691, S.724, S.748, S.750.

7. ここでいうブルシェンシャフト運動とは、ナポレオンに対する解放戦争(1813-15)に始まり、コッツェプーの殺害(1819)をへて、カールスパート決議(1819)によって政治的に弾圧されていく初期ブルシェンシャフトのことである。

8. この引用は、参考文献で挙げたグロイター社版全集の第5巻に依拠している。

9. 最近では、Pütz(S.111,S.113f.)が政治権力によるニーチェの誤読をもたらした理由として、彼の2極的認識方法を示唆している。

10. Royは、荒々しい口ぶりで実証的な学問傾向が批判されている初期ニーチェの文章を分析し、これを「批判を可能にする距離を解消してしまう」(S.575)不明瞭な文体であると結論している。さらに「哲学とは私たちの理性の魔法化に対する私たちの言語という手段による戦いである」(ebd.)というヴィトゲンシュタインのテーゼを引用し、その立場から初期ニーチェを批判している。これはニーチェの「静けさ」を視野に入れない研究の好例である。このヴィトゲンシュタインの言葉こそ、またニーチェの試みを的確に言いあてている。ニーチェは言葉の持つ必然的な呪縛を言葉そのものによって打ち破ろうとしたのである。

## 参考文献

*Nietzsche, Friedrich: Kritische Studienausgabe.* Hrsg.v.Giorgio Colli u.Mazzino, Montinari,Bd.1, dtv/ de Gruyter, Berlin u.New York 1988.

*Campioni, Giuliano: Von der Auflösung der Gemeinschaft zur Bejahung des "Freigeistes".* In: Nietzsche Studien, Bd.5, S.83-112, Walter de Gruyter, Berlin u.New York 1976.

*Gaarder, Jostein: Sofies Welt, Roman über die Geschichte der Philosophie.* Aus dem Norwegischen von Gabriele Haefs, Carl Hanser Verlag, München u.Wien 1993

*Janz, Curt, Paul: Friedrich Nietzsche Biographie. Bd.1.* dtv, München 1978.

*Kaulbach, Friedrich: Nietzsches Interpretation der Natur.* In: Nietzsche Studien, Bd.10/11, S.442-481, Walter de Gruyter, Berlin u.New York 1981/82.

*Kindler: Kindlers Neues Literatur Lexikon.* Hrsg.v.Walter Jens, Verlegt bei Kindler, München 1991.

*Pascal, Roy: Nietzsches Frühstil.* In: Wissen aus Erfahrung: Werkbegriff und Interpretation heute, S.561- 575, Max Niemeyer Verlag, Tübingen 1876.

*Pütz, Peter: Nietzsches Gefährlichkeit.* In: Waseda Blätter Bd.1, S.100-117, Tokyo 1994.

## Die Naturbeschreibung beim frühen Nietzsche

### — die stürmische Natur und die ruhige Natur in der "Zukunft unserer Bildungsanstalten" —

Shin KIMOTO

Im Jahr 1872, als sein Erstling "Geburt der Tragödie" in die Öffentlichkeit kam, hielt Nietzsche in Basel eine Vortragsreihe unter dem Titel "Über die Zukunft unserer Bildungsanstalten". Die Texte der Vorträge haben in ihrer Form eine Besonderheit. In den frühen Texten setzt sich Nietzsche normalerweise unmittelbar mit Griechentum und zeitgenössischer Kultur auseinander. Im Gegensatz dazu spielt er aber in unseren Texten durchaus die Rolle des "Erzählers", und teilt seinen Zuhörern die kritischen Gedanken eines alten Philosophen mit, dem er angeblich früher an einem Nachsommerabend als Bonner Student auf einem Berg am Rhein begegnet ist und der offenbar die Meinung Nietzsches selber vertritt. Dank dieser Erzählmethode befreit sich der Autor von der direkten Verantwortung für die vorgetragenen Gedanken, was ihm paradoxerweise ermöglicht, fast ohne Hemmung seine eigene Meinung vor seinen Zuhörern aus den "Eingeweiden" auszusprechen. Was in den Texten steht, z.B. die Naturbeschreibungen, ist so mit der Natur(den Eingeweiden) des Autors selber engverbunden: In Parallelität dazu läßt sich ein Zusammenhang zwischen der nächtlichen Atmosphäre des Berges und der Persönlichkeit des Philosophen feststellen.

Die Natur erscheint hier aber nicht mit nur einem Gesicht, sondern hat zwei gegensätzliche Gesichter: ein ruhiges und ein stürmisches. Die ruhige Natur hat mit der Atmosphäre auf dem Berg zu tun. Nietzsche beschreibt, wie die natürlichen Umstände im Laufe der Zeit immer ruhiger werden, was in der Arbeitskizzenhaft durch drei Zitate belegt wird. Die natürliche Ruhe übt einen so starken Einfluß auf die in der Geschichte auftretenden Personen aus, daß sich ihre Augen allmählich von außen nach innen wenden. Dazu trägt auch die Lehre des Philosophen, wie wichtig für die Bildung das Nachdenken in der Ruhe sei, bei. Die redende Stimme des Philosophen vereinigt sich mit der nächtlichen Atmosphäre, und wird als "Naturmusik" bezeichnet. Die beruhigende "Naturmusik" fängt jedoch nach und nach an, bedrohlich zu klingen. Die Vorträge sind Nietzsche zufolge eigentlich als ein "Herold" für diejenigen bestimmt, die die damaligen pädagogischen Verhältnisse angreifen sollen. Auch die anderen Personen reden, von dem Philosophen ermuntert, fast kämpferisch, was zu der vorherigen Ruhe einen großen Kontrast bildet. Die stürmische Natur vor allem als die Persönlichkeit wird in meiner Arbeit durch einige Zitate über Schiller erläutert, der von Nietzsche gern auf ideale Weise dargestellt wurde. Beide Arten von Natur treten fast fließend wechselhaft auf: Z.B. kommt in der Pause des Schweigens nach der langen kämpferisch gestimmten Rede die Ruhe zur Herrschaft, man fühlt sich da von der atemlosen Nacht umgeben, und lauscht der Naturstille. Nach einiger Zeit fängt man aber wieder durch einen kleinen Anlaß an, auf revolutionäre Weise zu sprechen. Dennoch

sollte man einmal die Frage stellen, inwiefern beide Naturen sich gegenseitig akzeptieren: Der Sturm zerstört leicht die Ruhe, während die Ruhe den Sturm nicht ausstehen kann. Sie lassen sich im Prinzip nicht miteinander versöhnen. In diesem Widerspruch besteht jedoch die dualistische Darstellungsmethode Nietzsches, um der wahren Natur so nah wie möglich zu kommen: Dank der streitenden Naturen kann die beschriebene Natur lebendig werden. Der Dualismus im Stil wird zu der frühen Zeit noch nicht so bewußt angewendet wie beim späten Nietzsche. Die Texte beweisen aber, daß er schon zu der Zeit die Denkweise des Schriftstellers bestimmte.